

幼 児 の 健 康 保 育 (十二)

お茶の水女子大學助教
愛 育 研 究 所 員 平 井 信 義

一〇 身體検査と測定 (つゞき)

(二) 榮養がよい、悪いの判定の仕方

私共医者も皆さん方も、「あの子は榮養がよい」「あの子は榮養が悪い」ということを申しますが、では何ういう根拠があつてよい悪いと決めますかと、開き直ると、答えに戸惑いしてしまいます。

普通には、視診で判断が下されますが、この視診には相當豊かな経験が必要となつて来ます。経験のある医者の方の判断は、いろいろな計測から割出された榮養判定法よりも正しい、といつてゐるのは、ドイツの有名な小兒科の医者チェルニー或いはシュレージンガーという人達であります。

然し、この方法が主観に頼つてゐる以上、どうしても見る医者によつて判断がちがうのは否定出来ないことでしょう。

或る人は現前の榮養についてだけを問題としますし、或る人は過去の榮養的欠陥なども考慮に入れようとしています。或る地方、地域では榮養不良な子供が多いために比較的榮養のよい子供が非常によいとされる危険がありますし、優れた榮養状態の子供が多いところでは、相當優れていても中位となつてしまふ、——という様なことになつて、絶對的な評価は非常に困難となつてしまいます。この觀方から、視診に重点をおく人も少くありません。

そこで、客觀的にどうして榮養状態を言い表したらよいか、ということになります。それには大別して二つの方法があります。一つは身體計測であり、他は理化学的な方法であります。

身體計測による方法として手取早いのは、体重のみによる判定法であります。殊に年齢別、身長別体重表を用いれば非常に役立つものであります。之で大体の見当がつくもので

あります。しかし厳しく栄養状態を考えている学者からは、栄養という様な複雑な過程を、体重のみで判断することは出来ない、筋肉とか皮下脂肪から判断する方がよい、といっている人もあります。

皮下脂肪、殊におへその脇の皮下脂肪の重みが、栄養状態を最もよく現わしていることを唱えている人もあります。之は皮厚計といつて皮ふをつまむ様な器械を用いて測ります。或いは脂肪組織に目安をおいたものとして、上膊を巻尺で測る方法もあります。この様に何故皮下脂肪と栄養との關係に目がつけられているかと、いふと、脂肪組織が栄養素の出し入れに最も敏速に應ずる性質があるため、といわれています。しかし、これら二つとも測定の方法が適切にいかず、したがつて誤差が非常に大きい点で、信頼性がうすくなる嫌いがあります。

この他にいろいろの指数が編み出されています。ローレルという人は $\frac{\text{体重 (g)}}{\text{身長 (cm)}^3} \times 100$ を、カウソは $\frac{\text{体重 (g)}}{\text{身長 (cm)}^3} \times 100$ を、ビルケは $\frac{\sqrt[3]{10 \text{ 体重}}}{\text{身長}} = 1$ など、この他に沢山の学者が考へ出しています。

機能的な判定法としては、今日、潜在性のビタミン欠乏を発見する方法が主なるものであつて、未だ総合的な判定となつていないし、幼稚園・保育所の先生方には直接結びつきがありませんから、省略しましょう。

栄養がよい、悪いの問題も、こうして考へて来るとなかなか面倒な壁があることとお思いでしょうが、半間の世界はいつもなかなか面倒なものであり、之を打破つて前進するところに、私共研究をしている者の生き甲斐があることを、汲みとつていたゞきたいのです。一日も早く、栄養状態をいゝ表わす適確な方法を考へ出したいと願つていますが、幼稚園・保育所の先生方は、私が第一番に述べた「年齢別・身長別体重」によつて栄養状態を汲みとられることがよいでしょう。

(三) 脊柱と胸廓の見方

脊柱は生理的に曲つています。子供を横から眺めてごらんなさい、胸部では後方に、腹部では前方に、少し突出しています。S字型をしてるといつてもよいでしょう。ところが、彎曲が普通の限界を超えて彎曲している子供があります、いわゆる猫背は、胸部の彎曲が著しいものであります。

子供を後から見た脊柱の線は真直でなければならぬのに、それが曲つている場合を側彎と云つています。右か左のいずれかに曲つていて、裸にさえすればはつきりするのです。

この脊柱彎曲は、一定の病氣即ち脊柱カリニス・尙僕病・脚の不具などから起るものもあるが、机とか腰掛の高さが不均衡であつたり、姿勢が悪い爲に曲ることも多く、殊に小児期は背部の筋肉が充分發育していないから、一層彎曲し易いのです。幼稚園・保育所でお絵描き・製作などのときに、姿

勢よく連ぶ様に充分注意していただきたいと思ひます。

胸廓の異常は可成多く見られます。形の異常なもの、發育のよくないものなど、——その中で扁平胸というのは、胸の厚みがなく平たい感じで、その上肋骨が強く傾斜していません。一見いかにも弱々しそうに見え、昔ならば肺病になる体格といわれる様な体付きです、——今は肺病になる体格などを信ずる人はありませんが——胸・背・肋間の筋肉の發育が不良なものが多いため、次に漏斗胸ですが、之は胸骨が内方に凹み、従つてみぞおちも凹んで、丁度ジョーゴの様になつてゐるもの、鳩胸とは胸骨が反対に前方に飛び出しているものであります。又、左と右とが形の違ふ左右不同胸もあります。之ら胸廓の異常はなかなか治療することはむづかしく、恐らく一生を同じ状態で送ることと思ひます。それは原因がまだはつきりしてゐないからで、遺伝的な傾向があると唱へてゐる人もあります。

この様な異常をもつてゐる子供を見ますと、すぐに「弱い體質」と考へる方があります。そして大事に保護をしてやらなければならぬ子供、——と考へ勝ちであります。成程古くから胸廓や脊柱に異常のある子供を「虚弱児」として扱ひましたが、果して之が弱い子供か否か、即断することは危険です。弱い子供については後述いたしますが、胸廓の異常を持つた子供でも、他の子供よりはるかに活動家であり、病氣を少しもしないという例に、しばしばぶつかります。です

からかういふ子供をみてもすぐに同情せず、その子供の活動振りをよく見守つていてやりたいものであります。保護を与えずぎると、それがもとで却つて弱い子供になつていく場合があるからです。但し平生から他の子供よりも栄養に注意し日光に当る機会を多くし、偏食などあれば癒しておくことが大切ですし、毎日きまつて適当な体操をすることが大切です。

繰返し申しますが、脊柱は人間のからだを支える中心でありますし、子供は背中の筋肉が弱いため悪い姿勢をしてゐるとときに背中が曲り易いから、どうぞよい姿勢でお絵描きや製作をする様、もし悪い姿勢をしていたら、お互に注意を合はう様に努めていたゞきたいものであります。

先生方の中にも時々背中を丸くしていくじなく歩いてゐる方がありますから、いつも胸を張つてスマートに歩く様に心掛けましょう。それは先生方の体の爲でもあり、又子供たちの模範ともなるのですから……。

(四) 眼の検査

眼の検査は、視力・屈折異常・色盲・眼の病氣などについて行ふのであります。

先づ視力の検査であります。そのそ幼稚園・保育所などでも眼が悪いのではないかと思はれる子供に気がつきま。絵をかくときに顔を画面にすりつける様にしたたり、遠く

を見るときに眼を細めたりする子供は近視ではないかと考える必要があります。

視力が良いか悪いかは教育上の大きな問題で、耳と同様にこの感覚器に欠陥があると、当然世の中の見方が狭くなり、発達のおさんな子供にとつては有害であります。

視力の検査には「視力表」を用いるのでありますが、一般のものは字の読めない子供には用いることが出来ませんので、幼児用として大小のどんぼとか蝶の絵が書いてある視力表がありますから、それをお用いになるとよいでしょう。

目の近い子供の中、約四分の一は先天性であり、四分の一は後天的であるといわれるのでありますが、後天的なもの原因としてはトラホーム・角膜炎・身体虚弱・梅毒などがありますから、一応専門医の診察をうける様にすゝめる可きであります。殊に急性結膜炎をやつたあとは角膜に潰瘍が出来易く、その結果近眼となる場合がありますから、そうした子供たちについては注意をしております。

乱視などはなかなか発見が困難でありますからお話を省きましょう。

色盲は、色の感覚に異常のある場合で、総ての色彩を区別することが出来ない全色盲、決つた色、多いのは赤・緑の色覚がない赤緑色盲があります。赤いクレヨンをとつてごらんなさい、或いは赤い色を指してごらんなさい、といつてそれが仲々出来ない様な子供は、知能が普通であれば、色盲ではないかと疑ふ必要があります。色盲を鑑別する表が出来てい

ますから、字や数字の読める子供にはそれを用いることが出来ます。幼児用に作られた絵で判別するものも出来ていて思ひます。

色盲は先天性であり、女性を通じて男の子に現れる病気でありますから、女の子には殆ど見られません。この病気は将来の職業の選択にも関係しますから、早くから注意が向けられて欲しいと思ひます。但し将来に色盲を矯正する眼鏡が出来るかもしれませんが………こうした遺伝のお話は精神衛生の項で詳しくしたいと思います。

眼の異常として斜視(やぶにらみ)があります。之も先天性の病気で、眼球を動かすたづなの役目をしている筋肉が、右左の長さがちがうために短い方に向いてしまつてゐる、——という性質のものであります。手術をすれば相当程度癒るものであります。友人などからからかわれることがあつて、劣等感を持つては可哀想ですから、先生方にその点注意をしていて頂きたいと思ひます。

(五) 耳の検査

聴力も子供の五官の一つとして非常に大切であります。聴力が弱いと精神機能の発達が充分にいかないことは、視力と同じことで、幼稚園・保育所などではしばしばぼんやりとした子供として扱われます。呼んでも返事をしない。不活潑な子供でもあります。そのまゝにしておいたのでは、すい分損をすることでしょう。悪い言葉などが耳に入らないでよいな

どと屁理屈をいう人はないでしょうが、兎に角知能はその子の発達の限度よりづつと低くなつてしまします。

この正しい検査には、普通、六米離れたところに子供を立たせ「トーキョー」「トーキョー」という様な言葉をさゝやいて、何をいつたか子供に反唱させるのであります。勿論片方づゝ検査するのですから、検査の耳を検査者の方に向けて他方の耳を塞いでおくこととします。

聴力の弱い子供の原因は、中耳炎・欧氏管炎・扁桃腺肥大・アデノイドなどがありますが、よく耳垢のつまつてゐることがありますから、いづれにせよ早く医者診察をうけることが大切です。

囁語検査を幼児に行うことは仲々困難です。はつきりと答えてくれないので、どの子供も耳が遠いことになつてしまします。又、懐中時計を耳から一定の距離において、きこえるかどうかを答えさせる方法もありますが、「きこえる？」ときいても「うん」、「きこえない？」ときいても「うん」をする子供が多いから検査はなかなか困難です。むしろ先生方に平生注意をして頂いて、呼んでも答えない、ぼんやりしてゐる、知能がおくれている様だ——という子供について耳が遠いことも考えていたゞきたいと思ひます。

(六) 齒の検査

齒の検査で一番大切なものは虫齒です。幼児はまだ生え変つていない、——即ち乳齒であります。戦争中は非常に虫齒

が減少したのに、近頃は又どんどんとふえ始めてゐるのは本當に残念なことです。虫齒はもち論齒のたちということも考えなくてはなりません、甘いもの(砂糖類)を与えすぎるためにどれだけ齒を犠牲にしているかわかりません。齒の弱さは母親・父親・祖母の甘さ加減と平行してゐるかも知れません。

口をあけさせて上下の虫齒を数えるわけですが、わづかに虫のくつてゐる部分も見落さない様にして頂きたいと思ひます。

以上身体計測と共に身体検査のときに行われる診療の見所を書いてみたわけですが、もとより之ら大部分は医者役目に属するものであり、幼稚園・保育所の先生方にお願ひすることではないかも知れません。然し先生方が検査や診察の介助をなさるときに、親心をもつていたゞきたいということが一つ、もう一つは幼児期の機能検査法に完全なものがないので、先生方の日頃の観察の助けをかりて、早く子供の異常に気付き、そして早く対策を取りたかつたからであります。感覚器官の欠点は子供の全体の精神発達を妨げます。殊に吸収のさかんな年代でありますから、その障碍も実に大きいのであります、注意を怠らない様にお願ひしたいと思います。